第 32 週

質問 86. 私たちは自分のどのような功績にもよらず、ただキリストを通して、恵みよって悲惨さから救われますが、なぜ私たちは必ず、続けて、善い行いをしなければならないのですか。

答えⅠ キリストはご自身の血によって私たちを救い、贖い、その聖霊によって、私たちを更新させ、神のかたちに似て行くようにされたからです。私たちは生活の行為を通して神の祝福に対して感謝を表し、[01] 私たちによって神は賛美を受けられます。[02] それは、信仰の実を通して、自分たちの信仰が確認できることでもあり、[03] 私たちの敬虔な姿を通して他の人々をも、キリストに導くためにです。[04]

❶ ハイデルベルク教理問答書の質問 3 番から 11 番までは、第一の部分として、罪による悲惨さに対する内容でした。質問 12 番から 85 番までは、第二の部分として、罪人を贖う恵みについてのことです。この第二の部分の中で、質問 59 番から 64 番までは、信仰義認に関連するものでした。

---

01 ロマ 6:13, 2:1–2、Ⅰペテロ 2:5–10.
02 マタイ 5:16、Ⅰコリント 6:19–20.
03 マタイ 7:17–18、ガラテヤ 5:22、Ⅱペテロ 1:10–11.
04 マタイ 5:14–16、ロマ 14:17–19、Ⅰペテロ 2:12, 3:1–2.

そして質問 86 番から最後までは、第三の部分として、救いの恵みのゆえに神に感謝を捧げる内容についてのことです。私たちは、救いの恵みのゆえに、必ず感謝しなければなりません。そして、その感謝は、私たちが救いの恵みを受けた後も善い行いを続けなければならない理由を説明しています。私たちが必ず、善い行いをする理由は、私たちが受けた救いの恩徳らのためです。

私たちは、キリストの血によって罪から贖われました。主は、私たちの悲惨さを取り去ってくださいました。そして聖霊によって、私たちを更新させて、神のかたちに似るようにしてくださいました。私たちを新しい命の力の実態の中にいるように、許可なさったのです（Ⅰコリント 1:30、Ⅱコリント 5:17）。救いの恵みを受けた者（新生した者）として、私たちは必ず善い行いをしなければなりません（Ⅰヨハネ 5:3、マタイ 11:30）。ハイデルベルク教理問答書の第三の部分は、聖化に関するものとして、信者の聖なる生き方と、キリストにあっての成長を扱います。

❷ キリストにあっての、義認と聖化の目的は、善い行いをするためです（エペソ 2:10、テトス 2:14）。キリストにあって受けた救いの恩恵は、私たちに当然のことながら感謝するようにさせます。その恩恵などから私たちは、聖霊の御業によって力を得られます。従って私たちは、善い行いを通して神に感謝を捧げられるようになりました（ヘブル 12:18、コロサイ 3:17）。救われた民の行為は、神の栄光のためという目的がありますが、それは、他の人々にも証しされるからです（Ⅰコリント 6:20、マタイ 5:16）。従って、救いの恵みと共に頂いている恩恵らを用い、善い行いをすることで神に栄光を帰すべきです。

❸ 救われた民の善い行いは、自分たちにも必要なことですが、それによって、自分が信仰の中にいることが確信できるようになります。私たちがまことの信仰の中にいるなら、その信仰は、ただ幻的な体験ではありません。ただ頭にだけあるとか、唇だけにあるのでもありません。まことの信仰は、それ自体で証しされるようになりますが、それがまさに善い行いです。

まことの信仰の中から善い行いが出て来るのです。善い木は、良い実を結び（マタイ 7:17–18）、悪い木は、悪い実を結ぶのが原理です（ヤコブ 2:17、Ⅰヨハネ 2:3–4、Ⅱペテロ 1:10）。従って、自分に信仰があって、自らキリストを信じると告白したとしても、その告白の真実性を、行いを通して確認して見ることです。ただ教理的知識に過ぎずに唇だけの告白なら、それは、まことの信仰ではありません。

❹ まことの神の民の善い行いは、他の人の救いのために必要です。私たちの清い行いと言語は、他の人々にまで、キリストを信じることについて勇気を与えます。特に、私たちの信仰的な対話は、他の人々に良い影響を及ぼします。そうだとするなら、私たちの善い行いが神の御前に、私たちの義になれることは決してありません。神の値なしにくださる恵みによって、私たちに、キリストの義が転嫁されることで、私たちを義となさったのです。従って私たちは、善い行いを持って神に感謝を見せなければなりません。それを通して神は栄光を受けられ、私たちを贖った目的が成し遂げられるのです（ルカ 1:74）。

このように善い行いは、信仰の実として私たちに確信を与えてくれます。私たちが偽り信仰ではなく、まことの信仰の中にいることを確信させてくれます。この善い行いは、隣人をキリストに導く手段となります。私たちはキリストにあって、義と聖と贖いと真理と命があることを叫ぶことができ、これらすべてが、恵みによって与えられる賜物であったことを誇ることができます。

❺ 神が人間を創造なさった目的は、人間を通して神を賛美させるためでした。しかし、人間が堕落してしまい、キリストが、この創造の目的を回復させました。従って、私たちの贖いの最終目的は、神をあがめさせるためです。神の御前に変えられた者として、必ず善い行いが現れなければなりません。

質問 87. 悪な生活を続けながら、神に感謝もせず、神へと立ち帰らない人も、救われることができますか。

答えⅠ 決して救われません。聖書には、汚れた者、偶像崇拝者、姦淫する者、盗む者、貪欲な者、酒に酔う者、誹謗中傷する者、強盗する者のような人は、神の国を相続として受けられないと教えています。[01]

❶ 善い行いと敬虔な生活は、新生の実です。つまり、新生した者には、必ず示されるべき証拠です。これは、救いの恵みに対して神に感謝する生活でもあり、救いをもたらしてくれる、まことの信仰の証拠でもあります。従って、信仰があると言いながら、このような生活が示されないのなら、自分を欺いており、嘘をつく者となるのです（Ⅰヨハネ 2:2-3）。不敬虔な生活を生きているとは、肉体の実の証拠であり、神に感謝もしないということ、さらに進むと、不信仰のしるしとなります（マタイ 7:16）。

❷ 教会の中にいながら、目立つように罪を犯す者がいます。不潔な行動と言葉によって、神の戒めを破る者ですが、不正な者に該当されます。偶像崇拝的な者たちは、神より他のものを余計に愛する者で、金や食べる飲むことを何より愛する者たちです（ピリピ 3:19）。姦淫する者たちは、結婚の誓いを破り、寝床を汚す者たちです。盗む者たちは、他人の所有を密かに取る者たちのことです。貪欲な者たちは、この世の富を積むために、あらゆる考えと行動をそこに合わせる者たちです（コロサイ 3:5）。酒に酔う者たちは、過度に酔っ払い、毒の酒を楽しんでいる者たちのことです。

中傷誹謗する者たちは、陰謀と偽りによって他人を害する者たちで、強盗たちは、他人の財産を強制に奪って使う者たちのことです。また、他人を憎むことも

---

01 Ⅰコリント 6:9-10、ガラテヤ 5:19-21、エペソ 5:5-6、Ⅰヨハネ 3:14.

殺人に該当されます（Ⅰヨハネ 3:15）。

このような罪に対してパウロは、神の国を相続として受けられない者たちの罪だと語っています（ガラテヤ 5:21）。また使徒ヨハネは、第二の死に該当する罪だと語っています（黙 21:8）。このような罪らの中で生活する者たちは、決して救われた民ではありません。

❸ 私たちは善行によって救われるのでは、決してなく、信仰によって救われます。その信仰には、必ず従順が同伴され、それは善い行いとして示されるようになっています。従ってまことの信仰は、敬虔な対話と生き方をもたらします。神が、罪人である私たちを赦し、恵みを施すのは、過去の罪とされた生活を続けて生きても良いというのではなく、神の聖さに相応しく聖なる生き方を生きるようにしようとのことです（Ⅰテサロニケ 4:7）。

それゆえ、信仰があって、恵みの下にいると言いながらも、悪事を働く者たちは救いとは関連がない者たちで、彼らは、その悪な働きに応じて神の審判と罪の定めを受けるようになっています（黙 20:13、ガラテヤ 6:8）。特に信仰あるふりをしながら、彼らの悪な行為によって、キリストの御名が不名誉にされたことは、より重い神の審判を受けるようになります（Ⅱペテロ 2:2-3、マタイ 18:7）。

❹ 悔い改めない者は救いを受けられません。しかし、新生の御業によって過去の罪となる生活を恥じるようになり、その罪から離れ、悔い改めながら神に出て来る者は救いを受けられます（Ⅰコリント 6:11）。そして、その者は、聖霊が起こす新生の御業によって、清められることを追求するようになります。従って、誰でも罪の中に留まり、相変わらず罪を愛し、唇だけで悔い改めだと言うのなら、救いの恵みは彼らにないことです。聖霊による新生の御業が、彼に起こっていないことです。

従って、新生の御業が、自分に起こっているのかどうかの可否を、自ら点検し、確認してみなければなりません（Ⅱコリント 13:5）。聖霊の御業によって自分の罪を自覚するようになり、罪の深刻さを悟らなければなりません。そして、罪から

離れ、神に立ち帰り、生ける神に仕えなければなりません（Ⅰテサロニケ 1:9）。それが聖なる生活であり、敬虔な生活です。

❺ 聖くなければだれも主を見ることはできません（ヘブル 12:14、マタイ 3:10、黙 21:27）。これは、ただ罪ない者が救われるという意味ではありません。信者たちも時々深刻な罪に陥ったりもします。信者も時に罪を犯すが、罪の中に住むことはありません。彼らは、罪の中で続けて生きられないのです。神の恵みによって、悔い改める中で、主に立ち帰るようになるからです（詩 51 篇）。従って、もし、悔い改めが欠如していて、やはり感謝もしない中で生きるなら、その者には救いがないということです。